

キャリア・ナラティブの構築としての キャリア教育の可能性と課題

瀬戸 知也

The Possibilities and Problems of Career Education as Construction of Career Narrative

Tomoya SETO

1. はじめに

本稿の目的は、キャリア形成に関する諸問題に関して、特に、「キャリア・ナラティブ」の構築という視点から検討を加え、キャリア・ガイダンスやキャリア・カウンセリング等の実践を総称した領域としての「キャリア教育」⁽¹⁾の可能性と課題を検討することにある。

既にPatton (2005) は、これまでの産業社会を前提とした「キャリア教育」の考え方においては、one-size-fits-all型のカリキュラムが優勢であったが、ポスト産業社会と呼ばれるこれからの社会における「キャリア教育」においては、また別のカリキュラムの考え方(いわば「オーダーメイド型」のカリキュラムの考え方)が必要とされるとして、「コンストラクティヴィスト・アプローチ」⁽²⁾による「キャリア教育」のあり方をめぐって議論している (Patton, 2005;瀬戸, 2007)。その議論の中で、Collin, A. & Watts, A. G. (1996) の議論を要約する形で、「コンストラクティヴィスト」による「キャリア教育」のポイントを以下の3点にまとめている (Patton, 2005, p.26.)。

- (1) 首尾一貫し、継続的で、信用できるストーリーを物語ることによって、学習者のキャリアを認証 (authorize) するよう支援すること。
- (2) ストーリー・ラインにおけるテーマや対立を確認 (identify) することによって、学習者の「キャリア・ナラティブ」に意味を付与するよう支援すること。
- (3) ストーリーの次のエピソードを達成するために必要とされるスキルを学ぶこと。

これらのポイントを総合すれば、「コンストラクティヴィスト・アプローチ」による「キャリア教育」の立場からみた「キャリア教育」の問題は、「キャリア・ナラティブ」の構築の問題としてとらえ直すことができるものと考えられる (瀬戸, 2007)。

以上の認識をふまえた上で、この考え方に含まれる可能性や課題をさらに検討し考察を展開するために、関連する論者の議論を参照・吟味しつつ、様々な視点から、このキャリア・ナラティブの構築という視点に関する諸問題を多角的に検討していきたいと考える。

2. 「キャリア教育」への「ナラティブ・アプローチ」について

Reid (2005) は、「キャリア教育 (キャリア・ガイダンス)」における「ナラティブ・アプローチ」⁹⁾の特徴を、「意味」を重視する立場から、相談者のストーリーを聞くところ(「傾聴」)にあるとしている。「自分のストーリーを語ることを認めることは、相談者のキャリア観を理解し、何が可能かを理解することを援助する」のであり、「意味のある文脈において新しいナラティブをつくること」を可能にする。「キャリア教育」における「ナラティブ・アプローチ」の可能性と課題は、以下のとおりに整理されている (Reid, 2005, pp.130-132.)。

可能性について

- 1) 相談者も実践家も双方を楽しませ夢中にさせ活気づける魅力をもつ。
- 2) 相談者への介入について創造的に考えることを援助する。
- 3) アイデンティティに関連する目標や行為の重要性を認識させることによって個人的ストーリーに注意を向けさせ、個人的思いこみを無視したり低く評価したりせず、明らかにする。
- 4) 「聞いてもらえない」という不満をもたらすような内容の選択的要約を避ける。
- 5) 目標を文脈の中に位置づけることによって、人々の関心や世界観にもとづくリアルな計画へと導く。
- 6) 相談者が過去にとらわれずに進化することができるように、自信や自尊感情をつくりあげる達成感や動作主 (agency) の感覚を促進する。
- 7) 個人的特性と文脈的影響を変えることができることを認識し、自らに課した限定的な可能性に挑戦する。
- 8) 相談者のストーリーへの傾聴と適切な問いかけによって、個人にとって何が重要かについての不正確な信念にもとつき何がベストであるかについて想定することを避けるよう援助する。
- 9) 信用や信頼関係が問題にならずに、即座にキャリアや人生のテーマをみつけることができる。
- 10) 自分のやり方で自分のストーリーを語る場所と時間を与えることによって自己呈示のスキルを発展させることができる。
- 11) 急場しのぎの解決の仕方をとらないことによって「回転ドア」症候群を避けることができる。
- 12) ストーリーを再著述することを援助する共同制作的アプローチの重要性を強調することは、新しい選択に向けての可能性をひらく。

課題について

- 1) 経験がないあるいは訓練を受けていない実践家の場合、相談者に害を及ぼす危険性があるという意味で勧められない。
- 2) 解決志向のブリーフセラピーとは対照的に、過去の問題に強調点を置きすぎるものとして誤解されやすい。
- 3) 関係者による長期的な関与を要求するプロジェクトになりやすい。
- 4) 修正されるべき問題という観点からだけ行為を観察するような欠陥モデルの範囲内で適用されると、個人の病理化が導かれる危険性がある。

- 5) 焦点があまりに個人化しすぎてしまい、社会的文脈を考慮しないと意思決定における家族や地域社会の影響を無視することになり、いくつかの集団にとっては適合的でなくなる。
- 6) 自分のストーリーを語ることに不快を感じる者たちにとっては不適合であり、その者たちには自らの関心を関連付けるための特別な援助が必要である。
- 7) 問題とされている領域についての科学的・数量的な調査の欠如を指摘する実証主義者には関心がもたれない。
- 8) 信用や信頼を築くための特別な仕事が必要とされ、時間や費用がかかりすぎる。

3. 『パイの物語』と「キャリア教育」問題

「キャリア教育（キャリア・ガイダンス）」における「ナラティブ・アプローチ」の可能性や課題を考えるにあたって、Reid（2005）はヤン・マーテルの小説『パイの物語』（Martel, Yann, 2002）の一部分を例として紹介し、説明を加えている。

物語の概略は次のとおりである。「1977年7月2日。インドのマドラスからカナダのモントリオールへと出航した日本の貨物船ツシマ丸は太平洋上で嵐に巻き込まれ、あえなく沈没した。たった一艘しかない救命ボートに乗り助かったのは、動物たちを連れカナダへ移住する途中だったインドの動物園経営者の息子パイ・パテル16歳。ほかには後脚を骨折したシマウマ、オランウータン、ハイエナ、そしてこの世で最も美しく危険な獣—ベンガルトラのリチャード・パーカーが一緒だった。広大な海洋にぼつりと浮かぶ命の舟。残されたのはわずかな非常食と水。こうして1人と4頭の凄絶なサバイバル漂流が始まった…。」^[4]

Reid（2005）は、この物語の中から、ツシマ丸の沈没の原因を調査に来た日本人の質問に対して生存者のパイ・パテルが話した4頭の動物との漂流の話の後交わされた会話部分を引用している。引用箇所は次のとおりである。

「言葉を使ってなにかを語るということ—それが英語でも日本語でも—すなわち、なにかを創作することではありませんか?」「うーむ・・・」「世界はそのままではあり得ません。ぼくたちがその世界をどう理解するかということでしょう?そして、なにかを理解することは、ぼくたちがなにかをもらすことでしょうか?そうすると人生は物語ということになりませんか?」「ははは!あなたはとても理屈がお上手ですね、パテルさん」・・・パイ・パテル「現実を反映する言葉を聞きたいのですか?」「そうですね」「現実を欺く言葉ではなく?」「その通りです」「しかし、トラは現実を欺いてはいませんよ」「お願いですからトラのことはもう」「あなたがたがなにを求めているのかわかりますよ。自分が驚かないですむ物語ですよね。それならすでに自分が知っていることを確認するだけでいい。自分よりも高いところを見たり、遠いところに目を向けたり、ふだんとちがうものを見方をしたりしないですむ。要するに月並みな物語が聞きたいのです。型にはまった物語。あなた方が求めているのは、乾き切った不毛な事実なのです」(Martel, Yann訳書, 2004, pp.446-447.)

そしてReid（2005）は、この引用箇所をふまえて、「キャリア教育（キャリア・ガイダンス）」の実践が「高いところ」や「遠いところ」、「ふだんとちがうもの見方」を目的とするならば、「実践家は他の人々のストーリーを理解できるようになる必要がある」と述べている。「一次元的な介入は、平板で固定されたストーリーにもとづくものになりがちである」と論じ、ナラティブ・アプローチによる改善を提案している（Reid, 2005, p.132.）。

4. 「多元的現実」としてのキャリア・ナラティブの構築という視点

『パイの物語』は、キャリア教育の実践において、相談者のストーリーを「傾聴」することの意義を明確にするとともに、現実の構築が「一次的」ではなく、「多元的」になされているということへの注意を喚起するものでもあった。この「多元的現実」⁵⁾としてのキャリア・ナラティブの構築という視点の意義について、さらに別の例を参照しつつ考察を加えてみよう。

たとえばレオ・レオーニの絵本『フレデリック』(Lionni, Leo.,1967)の物語の中では、ネズミたちが冬の寒さに備えてみんなで食べ物を集める活動をしている間フレデリックは同じ活動には従事せず、じっとしているだけで、他のネズミからみれば怠けているようにしかみえない。しかし、冬の寒さが訪れ、他のネズミたちが寒さに震え、灰色の気分沈んでいるとき、フレデリックは、じっとしているだけにみえたその期間に集めた様々な色の物語をみんなに語って聞かせることにより、暖かな世界を味わわせる。「君って詩人だったんだ」と言われ、顔を赤らめる場面で終了するこの絵本の物語では、表面的な観察行為（「一次的」な観察行為）が見逃しているが、同時に進行している「多元的現実」の構築（すなわち、一匹の詩人の誕生という「現実」の構築）を見事に表現させている。

「キャリア教育」の実践においても、学習者による「多元的現実」の構築としてのキャリア・ナラティブの構築という視点をもつことによって、Reid (2005) が指摘する「一次的な介入」を回避することができるのではないと思われる。

5. キャリア・ナラティブの構築における「偶然性」の意味

郵便配達夫シュヴァルは、フランスの田舎町オートリーヴで、33年の歳月をかけ単独で夢の宮殿をつくりあげた人物として知られている。彼がそのような無謀ともいえる仕事を始めるに至ったきっかけとなったという次のエピソードは、キャリア・ナラティブの構築という問題を考える上で示唆的であるように思われる。

「当時私は、四十歳という人生の大きな節目を三年過ぎていた。これは、ばかげた企てをはじめたり、空中楼閣を築く年齢ではない。ところで、私の夢が少しずつ忘却の霧の中に沈みはじめていたとき、突然或る出来事がそれを蘇らせた。私の足が石につまずいて、すんでのところどころびそうになったのだ。私は、つまずいた石を間近で見ようと思った。それがあまり変わった形をしていたので、拾って持って帰った。翌日、同じ場所に戻ったところ、もっとすばらしい石がいくつも見つかった。その場で集めてみて、みごとに思えたので、私は夢中になってしまった。『自然が彫刻を恵んでくれるのだから、私は建築家と石工になろう（それに誰だって、いくらかは石工ではないだろうか?）』と思ったのは、その時のことである。私は、道を歩き続けながら、不可能という言葉は存在しない、と言ったナポレオン1世のことを考えた。」(岡谷, 1992, pp.39-40.)

このエピソードは、「セレンディピティ(serendipity)」（「偶然からモノを見つけ出す能力」(沢泉,2002))の物語としても読めると同時に、キャリア形成における「偶然性」の意味を例証する物語として読むことができる。

同様なエピソードは、キャリアにおける重大な転回点をもった人々のライフ・ストーリーの中にいろいろな形で見出すことができる。たとえば浮谷東次郎という人物が15歳のとき体験

した1500KMにも及ぶバイクによる単独旅行の途上において、「スイカ売りの少女」や映画「南極大陸」と偶然に出会えたことが、その後の彼の生き方や考え方を大きく変えていく契機になった点については以前検討したことがある（瀬戸，2007）。

キャリア形成において「偶然性」がいかに重要な役割を果たすかについては、キャリア理論における「ブランド・ハプスタンス理論（J. クランボルツ）」や「ポジティブ・アンサー・トゥンティ理論（H.B.ジラット）」などの理論⁶が説明していることであるが、ここで確認しておきたいことは、「偶然の出来事」を単なる偶然にとどめずに、新たな意味を発見し、創造にむすびつけてゆくことの意味である。「偶然の出来事」には、幸運な偶然だけでなく、リスクとなる偶然もあるであろうし、そもそも「偶然の出来事」を見逃してしまえば、「セレンディピティ」は現象しない。つまり、キャリア形成にとっての「偶然の出来事」の意味を考える際により重要になってくるのは、その出来事を新たな物語の生成へと結びつけてゆくことができるような「キャリア・コンピタンシー」（小杉(2002)等）の問題について考えることではなかろうか。

では、どのような「キャリア・コンピタンシー」が重要になるかといえば、「ナラティブ・イマジネーション」（Nussbaum,1997；von Wright, Moira.,2002）が特に重要ではないか、と私は考えている。「ナラティブ・イマジネーション」とは、「他人のストーリーの理解力ある読み手になる能力」であり、「他人の靴をはく力」「他人の世界におけるツーリストやゲスト以上の存在になること」であり、「自己中心的なポジションを超越すること」によって「開かれた自己」を獲得し、「民主的的市民性」⁷を身につける能力のことである（von Wright,Moira., 2002, pp.412-413.）。この「ナラティブ・イマジネーション」によって「偶然性」はキャリア形成にとっての意味ある「偶然性」となり得るのではなかろうか。

6. キャリア・ナラティブの構築によるキャリア形成支援の可能性

かつて、特別活動の実践において「ナラティブ・アプローチ」を導入することの意味を検討する中で、「キャリア・カウンセリング」の可能性の問題をめぐって、以下のとおりの指摘をおこなったことがある。

「たとえば、キャリア・カウンセリングをめぐって、コ克蘭（1997）は、「キャリアにおける意味をつくりだす基盤として、ナラティブがある」とおさえた上で、キャリア・カウンセリングの課題を、「人々が、より意味のあるキャリア・ナラティブを構築し、その役を演ずるよう援助すること」に見出している。さらに、他のカウンセリングとキャリア・カウンセリングとの違いを「未来のナラティブ future narrative」を強調する「時間的スコープ」の要求にある、と指摘している。つまり、学級活動や学校行事の実践において、ナラティブの視角に立ったキャリア・カウンセリングなどを実施する事によって、より効果的な教育実践活動に結びつくことが期待されるのではなかろうか。」（瀬戸，2000, pp.111-112.）

この指摘をめぐって、ここでは、「キャリア・ナラティブ」の構築によるキャリア形成の支援の可能性という観点から、その可能性についてもう一度考え直してみることにして。

第一に、「傾聴」によって相談者（学習者）のキャリア・ナラティブの構築を支援するという基本的な視点についてみると、学級活動や学校行事、クラブ活動などいくつかの場面においてその可能性を見出すことができるといえよう。たとえば「学級開き」の実践において、学級

の構成員のそれぞれのライフ・ストーリーが語られる機会が提供される可能性が高いが、その際にキャリア・ナラティブの構築としての実践の特徴を明確にすることができるだろう。

第二に、「多元的現実」としてキャリア・ナラティブの理解というスタンスに立つ特別活動の実践のあり方についてみると、たとえばクラブ活動や部活動など課外活動において、多様な活動の存在を知ること、実際にその活動に参加すること、他校のクラブ活動・部活動との交流による自校の活動の相対化の可能性などは、「多元的現実」としてのキャリア・ナラティブの構築を支援する機会としてとらえることができるだろう。

第三に、「偶然性」の問題。「偶然の出来事」を単なる偶然にとどめずに、新たな意味を発見し、創造にむすびつけてゆけるような「ナラティブ・イマジネーション」の育成という問題についてはどう考えたらよいであろうか。

たとえば学校行事においては、たとえ十分に計画され、準備された行事であったとしても、行事前の練習過程や当日の運営過程などにおいて、様々な予期せぬ偶発的出来事が発生し、それに対処することは、当然のごとくおこなわれている。それらの出来事の中に、他者の他者性を理解すること（他者の経験を経験すること）の機会を見出し、キャリア・ナラティブの構築への過程としてとらえ直す（リフレーミングする）ことができるかどうか重要な視点となるのではなかろうか。

看護実践教育の領域において、エキスパートナースを育成するキャリア開発の技法としてのナラティブ法を解説した論文の中で、ギボンズ（2003）は、「ナラティブ」を奨励する文化の発展を阻害しかねない「神話」の一つとして、「ナラティブは普通ではないストーリーである」という神話があると述べている。これは、ナースが臨床で出会う何の変哲もない出来事に潜んでいるささいな問題を考えるところから、キャリア開発につながる説得力ある「ナラティブ」が形成される可能性があることを指摘した議論である。

ナラティブ・アプローチによるキャリア教育の可能性を考える場合においても同様の指摘が有効ではなかろうか。つまり、児童生徒や教師が学校行事の実践等で経験する何の変哲もない出来事に潜んでいるささいな問題を考えるところから、「ナラティブ・イマジネーション」が育ち、キャリア形成を促進する説得力ある「キャリア・ナラティブ」が構築されていく可能性がうまれるといえるのではないかと考えられる。

<注>

- (1) 「キャリア教育」については、現在の日本の教育界では、『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』（平成16年1月）で示された「キャリア」の定義、すなわち「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」としての「キャリア」の定義にもとづき、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」としての「キャリア教育」のとらえ方が示されているが、ここでは、キャリア形成を支援する働きかけ全般（「キャリア・ガイダンス」や「キャリア・カウンセリング」を含む）を示す領域の概念として「キャリア教育」を考えておきたい。
- (2) 「コンストラクティヴィスト・アプローチ」または「コンストラクティヴィズム（構成主義）」は、「オブジェクティヴィズム（客観主義）」に対置される認識論的・研究方法論的立場である。

Jonassen(1991)によれば、コンストラクティヴィズムの立場は、「現実(リアリティ)は知る者が構築するかあるいは少なくとも自分の経験に基づいて解釈するものであり、対象や出来事を解釈するためにわれわれが用いる自分の経験や精神構造、信念からどのように知識を構築していくか、に関心をもつ」立場である(Jonassen,1991,p.29.)

- (3) 「ナラティブ・アプローチ」については、かつて不登校問題を扱った拙著論文の注において次のとおり説明した。「広義の『ナラティブ・アプローチ』の立場は、『存在論的カテゴリー』としての『物語』、すなわちあらゆる人間のコミュニケーションは物語としてみられる必要があるとする『物語パラダイム』(『メタ・パラダイム』としての『物語パラダイム』)の考え方を拡張し、さまざまに展開されてきた認識論的カテゴリーとしての『物語』の視角がもつ方法的・方略的側面を視野におさめることを意図した概念」であり、「ナラトロジーとナラティブ研究を総称する立場。と同時に、『アプローチ』として方向づけることで、研究の視角としての『ナラティブ』の概念を明確にする立場の表明でもある」と、私は考えている。」(瀬戸,2001,pp.59-60.)
- (4) 紀伊国屋書店BOOKWEB (<http://bookweb.kinokuniya.co.jp/htm/4812415330.html>) より引用(「BOOK」データベース)。
- (5) 「多元的現実(multiple realities)」については、現象学的社会学者のアルフレッド・シュッツによる「多元的現実について」(Schutz訳書,1985,pp.9-80.)に詳しく記述されている。シュッツは、W.ジェームズの「多元的宇宙」の考え方を拡張し、「夢」「芸術」「宗教」「科学」「遊び」など様々の世界を「限定的な意味領域」としてとらえ、それらの世界がいずれも「固有の認識様式」をもち、「それぞれの世界の内では、経験はすべて、その認知様式に関してみれば、それ自体で一貫しており、さらにお互いに両立可能である」(Schutz訳書,1985,p.41.)と述べている。
- (6) 「プランド・ハプンスタンス(Planned Happenstance)」理論は、「計画された偶発性」理論と訳され、「キャリアの選択肢はいつもオープンにし、予期せぬ出来事をキャリアのチャンスとして利用する、そのためにそのような出来事を“意図的に”創り出す行動を取れ、行動を変えろ」と考える理論であり、「ポジティブ・アンサートンティ(Positive Uncertainty)」理論は、「不確実性を積極的に取り入れる」理論と訳され、「将来をもともと不確実なものとして受け止め、その不確実性を前向きにとらえる、ということが大切である」と考える理論である(小杉,2002,pp.125-127)。
- (7) von Wright, Moira. (2002) の言う「民主的市民性」は、「教養ある世界市民」とも言い換えられ、その中身は、「自己を批判的に検討し、自省する力」と「人類の一員として自分を見る力(“homines aperti(開かれた人々)”)の視角)」を統合した能力としての「他者の感情と欲望を理解する力」であると説明している(von Wright, Moira.,2002,pp.408-413.)。

<引用・参考文献>

- Cochran, L., 1997, *Career Counseling: A Narrative Approach*, SAGE.
- Collin, A. & Watts, A. G., 1996, The death and transfiguration of career - and of career guidance?, *BRITISH JOURNAL OF GUIDANCE AND COUNSELLING*, VOL 24, No 3.
- ギボンズ,2003,「ナラティブで看護実践を伝え、エキスパートナースを育成する」照林社編集部編『エキスパートナースになるためのキャリア開発』照林社。
- Jonassen, D.H., 1991, "Evaluating Constructivistic Learning," *Educational Technology*, September 1991.
- 小杉俊哉, 2002, 『キャリア・コンピタンス』日本能率協会マネジメントセンター。
- Krumboltz, John D., & Levin Al S., 2004, *Luck is No accident*, Impact Publishers (=2005, 花田他訳『その幸運は偶然ではないんです!』ダイヤモンド社)
- Lionni, Leo., 1967, *Frederick*, Dragonfly Books.
- Martel, Yann, 2002, *Life of Pi*, Harcourt(=2004,唐沢則幸訳『パイの物語』竹書房)

Nussbaum, M.C., 1997, *Cultivating Humanity*, Harvard university press.

岡谷公二, 1992, 『郵便配達夫シュヴァルの理想宮』作品社。

Patton, W., 2005, "A Postmodern approach to career education: What does it like?," *Perspectives in Education*, 23 (2)

Reid, H.L., 2005, "Narrative and Career Guidance: Beyond Small Talk and Towards Useful Dialogue for the 21st Century", *International Journal for Educational and Vocational Guidance*, Vol.5, no.2.

沢泉重一, 2002, 『偶然からモノを見つけだす能力—「セレンディピティ」の活かし方』角川書店。

Schutz, Alfred., 1962, *Collected Papers: The Problem of Social reality*, Martinus Nijhoff (=1985, 渡部他訳『アルフレッド・シュッツ著作集第2巻社会的現実の問題(Ⅱ)』マルジュ社)

瀬戸知也, 2000, 「学校知と実践—ナラティブとしての教育を考える」永井・古賀編『<教師>という仕事=ワーク』学文社。

瀬戸知也, 2001, 「不登校ナラティブのゆくえ」『教育社会学研究第68集』東洋館出版社。

瀬戸知也, 2007, 「『キャリア教育』問題と子どもの社会化—コンストラクティヴィスト・アプローチ」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学第16号』

von Wright, Moira., 2002, "Narrative Imagination and Taking the Perspective of Others," *Studies in Philosophy and Education*, 21.

(付記) 本稿は日本特別活動学会第16回大会(2007年8月19日, 於: 獨協大学)において口頭発表した内容の一部に加筆修正を施したものである。

(2008年9月26日受理)